

公立中高一貫校  
レポート #13

# 東京都立両国高等学校 附属中学校

【東京都墨田区】

## 下町の超老舗校は「考える国語」を切り札に、スカイツリーのようにぐんぐん伸びゆく。

両国高校は1901年創立の府立三中を前身とし、かつては東大進学者が60名に上る年もあった、東京東部を代表する進学校。06年にいち早く附属中学を開校し、注目を集めるにつけ、独自のアクティブ・ラーニング(AL)路線を開拓。今いっそうの進学実績も期待される。

取材・文／鈴木隆祐 写真／松沢雅彦  
デザイン／タケウチフミヒロ (landfish)

都立両国高校並びに附属中のお膝元の繁華街、錦糸町を訪れると、東京の懐の深さをつくづく感じる。庶民的な飲食店が充実し、活力に溢れている。

現在の都立校に学区はないから、一貫校の選択

にも大きな視野を持てる。常識的な通学時間内でも、相当の候補が挙がるだろう。それが仮に1時間内としても、私が住む都内西部からでも、半蔵門線延伸のおかげで、ちょうどそれくらいで錦糸町に出られる。池袋や渋谷までなら30分前後だが、「可愛い子には旅をさせよ」、あえての選択もあるはずだ。

この都内有数の繁華街を抱える事情を、鯨岡廣隆校長は「下町はよく言われるように、地方出身者の集まりで、だからオープンなんです。しかも、関東大震災と東京大空襲で、二度も灰燼に帰した中から立ち上がってきた。それぞれで約10万人が犠牲になっている。町がそんな経験を持っている



骨っぽく見えて気さくな鯨岡校長は、下町育ちかと思いきや郊外の出身。話題も豊富なので元は社会科…ではなく、保健体育の教員。行政(都教委)が長く、20年に渡って都内あちこちを回ったので、土地土地の見識が深いのだ



るのは大きい。スクラップ&ビルドがマインドになっているんですね」

戦後しばらくは東京の文化や遊興の中心は下町だった。今も残る花王だけでなく、ライオンや資生堂などの大工場も多くあり、生産力も高かった。だが、郊外や都外にそれらが移転し、宅地としても発展すると、人口の逆転現象が起きた。活気を失った下町には殺伐とした印象のみが回った。それが昨今、東京スカイツリーに象徴される再開発に成功。メトロ延伸に代表されるように、交通の利便性も増した。

「学校にとって立地は大事。両国も元は(府立)旧制三中で、地域に歴史ある進学校がここにしかなかったんですね。だから、地元の人もプライドを持ってきている」と語る校長だが、生い立ちを聞けば、私と同じ東京郊外の育ち。下町を客観視し、その魅力に開眼している様子だ。地域の人たちから注がれる温かい目を鑑みれば、デメリットもメリットとなる。

都立校では最も率先してALを受け容れ、優れた成果も上げてきた。ALに多いグループワークにいかにも自然に向かわせるかにも、学習環境が大事。下町の雑多さに育まれる両国では、初代校長の八田三喜が唱えた「江戸っ子中学」の気風が残り、ALとも親和性が高いと見える。庶民肌のリベラリストだった八田の精神が、現代に宿ったと言えなくもない。

八田は前任校の新潟県立佐渡中学(現佐渡高校)では、国家と社会(民)は共に進歩すべきと

下町の開放性でALをいっそう実り豊かに：

### 基本データ

**沿革**  
1901年：東京府第一中学校(現日比谷高)の分校を東京府立第三中学校と改称  
1902年：築地から現在地に移転  
1950年：東京都立両国高等学校に改称  
1994年：それまでのグループ選抜から現在の単独選抜制へ  
2006年：附属中学校開校

**校長** 鯨岡廣隆  
**所在地** 東京都墨田区江東橋 1-7-14  
**交通** JR・東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅より徒歩約5分  
都営新宿線菊川駅・住吉駅より徒歩約10分  
**出身著名人** (本文紹介以外) 蛭川虎三、飯島延浩、正木ひろし、伊東光晴、家城巳代治、石田衣良、川端龍子、木村光一、小池昌代、杉山寧、関野吉晴、立原道造、堀辰雄、深代博郎、大塚範一…etc.

### 2019年度 志願状況

18年度の倍率6.13倍に較べても増加傾向。都立一貫校10校中、白鷗高校附属の6.68倍に次ぐ2位で、20年度もさらに激化すると予想される。

募集定員	120名
受検者数	男子 390名 女子 393名
倍率	6.53倍

する「社会共棲論」を説き、二・二六事件に連座した北一輝の思想形成に大きな影響を与えた。と同時に、三中ではファシズム批判の先鋒だった経済学者の河合栄治郎、刺殺された元社会党委員長の浅沼稻次郎のその後の人生を決定づけた。今、最も顧みられるべき教育者だ。

### 目を見張る、考える国語の浸透力

授業を回り出すと、いきなり目を引いたのが、ハサミを駆使する中1国語。テキストを読んで、構成について書きつけたプリントは、切り離すとカード状になる。「ザクザク切りながら、耳だけこちらに貸してください」と飯塚理子教諭は生徒に呼びかける。記録文に必要な5W1Hを、パズルの要領でつかませようというのだろう。このカードを同じ班の生徒と交換すれば、読みを多層的に扱げもできる。

テーマは『シカの「落穂拾い」—フィールドノートの記録から』。教科書中の京大豊長類研究所助教、辻大和さんの著作だ。辻さんは宮城県の





金華山島でニホンザルの食物の調査中、サルが樹上から落とす植物を地上のシカが採食する場面にたまたま遭遇。その後の観察の結果からも、全国でシカがサルの恩恵に与っている可能性を指摘した。



両国は芥川龍之介を筆頭に、作家を多数輩出している。校内には目立たぬが、龍之介の碑もある。そこには「自分は大川があるが故に、『東京』を愛し、『東京』あるが故に、生活を愛するのである」と結ばれる、柳川隆之介名義で書いた初期の随筆『大川の水』の一節が引かれている。大川とは隅田川下流域を指す。この括弧に入る言葉は、都内のどこで育ったか、どんな学校で学んだかでも大きく変わるだろう。

しかし、龍之介ほど考えて書いた、また書くことで考えた人もいまい。それが作品からも伝わる。両国の校長室にも三中在校時の彼の写真が掲げられているが、単に最も知られる卒業生というのでなしに、そのスタンスが学校のアイデンティティなのだと感じる。それが学校設定科目の「考える国語」にも反映されている。

学校サイトにも書かれているように、「すべての知的活動の基盤」なのが国語力。両国では教科

切れ目のついたプリントに書き込んだ後、ハサミでカット。中1国語での記録文の構成を物理的につかませる試みだ



朝の小作文が廊下の壁に貼り出されるのも、他の生徒は「どう考えているか」を共有するため。芥川龍之介が学んだ学校だけあって、『蜘蛛の糸』の感想文がさらに貼られていた

すべての学習において、その育成を図っている。さらに独自カリキュラムとして、中2で「考える国語1」、高2で「考える国語2」を学ぶが、教科書は使わない。中2ではディベート、高2でビブリオバトルを行い、論理的な表現力を磨く。

中3国語では森鷗外の『高瀬舟』に取り組んでいた。登場人物は島流しの罪人を京都から大阪まで送る舟に乗り込んだ、護送役の羽田庄兵衛に弟を殺害した喜助。庄兵衛は喜助のあまりに「晴れやか」な表情に惑い、思わず犯行の経緯を尋ねる。喜助は病で苦しんできた弟が自殺する、止めを刺したのだ。

最も初期に尊厳死を描いたと再評価の気運も高

高1コミュニケーション英語はチームティーチングで進める。JETのジェームズさん。「国際紛争解決的手段にはじゃんけんを」とユーモアラスに提唱し、生徒の考え方の枠を広げる

まる、この高名な小説もやはりグループで読み解いていく。相蘇純一教諭は「安楽死というテーマを掘り下げすぎると、文学論から遠ざかる」と慎重ながら、多くの生徒が庄兵衛のように、「それが罪であろうか」と疑問を持つと語る。自殺補助といっても、単に見るに見かねてではなく、弟が望むから止めも刺したのだ。ところが、現刑法(第202条)でも自殺教唆と同じ扱いで、「6月以上7年以下の懲役又は禁錮に処する」とある。

私も日本文学を大学でまで専攻したが、つくづく難しい。とてもテストを作って、点数など付けられない。流刑手当にわずか二百文(今の5000円ほど)をもらって喜ぶ喜助はまた、「足るを知る」の手本のようにも語られる。これを疑問視する生徒もわりと多い。「欲が少なすぎる。それが権力の横暴を許す」というのだ。

『高瀬舟』の舞台の寛政の頃から明治維新を迎え、急速に国家と民は進化してきた。しかし、人間の本质は変わらない。老師の「知足者富」を本

当にわかっている者がどれほどいよう。このテキストを理解するにも、また人生の難題に立ち向かうにも、相蘇教諭も言う通り、できるだけ多くの考えと交わり、生き方にも触れるべきなのだ。ここにも八田イズムの健在を見た。

「ALが盛んな印象が強いでしょうが、両国はなんでもありません。基礎的な座学や朝学習に小テスト、できなければ追試を何度でもやる。しかし、そんな詰め込み型の一方で、“上に羽ばたく授業”として『考える国語』も設定しています」そう語る、国語科主任の酒井誠教諭も実は両国の卒業生。ALやディベートに憧れて入学する生徒は往々にして「地道な努力を知らない」。だが、積み重ねの中で得られた見識があってこそ、さらに上へと羽ばたけ、大学入試でも結果を残せるのだ。

教えるのは易く、考えさせるのは難

両国というと、今年から新渡戸文化学園に転じた、「教えない授業」の山本崇雄教諭が長く勤務したことでも知られる。山本教諭の授業は本連載の都立武蔵の項で紹介しているが、生徒が主体と

英語で考えるから、英語が自然に飛び出す



なって動く流れを生み出す、魔法を心得ているという印象を受けた。山本教諭とともに授業開発をしてきた、布村奈緒子教諭の高1英語での指導ぶり（そう言っちは叱られるか）を見ても、徹底して上からは教えない。その代わりに生徒をひたすら動かす。

外国語指導助手（JET）のジェームズさんが導入を作る。ユーモアを交えた前説をするのだが、数回に渡って取り組むテーマ『国際平和のためになにをすべきか』について、同じJET仲間でも考えが違そう。生徒はこのテーマで各自意見をまとめ、今回は1人ずつ発表せねばならない。今日はJETたちの英文が後と前の黒板に計4枚貼り出され、それらに目を通してディスカッションをする。他のJETの文には、「強力なリーダーシップを持った、世界大統領を全人類が選ぶべき」という、ちょっと極端な意見もあった。

しかし、それはあくまで授業の後半で、前半は教科書中の広島・長崎の二重被爆者についてのエッセイ『Twice Bombed, Twice Survived』を読み進めるのだ。三菱造船の技術者だった山口<sup>つば</sup>さんが出張先の広島と、勤務地の長崎で立て続け

に原爆に遭い、晩年は生き証人として講演に回り、オバマ前米大統領の広島訪問にも結びついた。

瞬く間に目まぐるしい50分が過ぎ、すぐに出た私の感想はいたって平凡、「評判通りの活発さですね」だった。布村教諭の回答も素っ気なく、「ウチの生徒はすっかり慣れっこですよ」。教職課程を修めた、教師が教科を教えられるのは当たり前。八田校長の時代から、生徒はただ教わるより、そんな教師と少しは肩を並べて考えたいはずだ。

だから、オールイングリッシュは教授法に留まらない。生徒には中1から、自身の意見を積極的に述べさせるよう仕向けている。英語圏にも付度や空気読みがないわけではないが、しっかり主張をしなければ、無能だと思われる。見学した授業もよくよく、大変な情報量だ。体験や取材に基づく、強いメッセージを発するのは難しかろうが、次回の発表まで見届けたいと思われた。

**まねぶは学ぶを目の当たりに**

思わず固唾を呑んだのが、クラス総員で漫画の模写を描いていた中3美術だった。それも本



これぞ山本五十六の「やってみせ」。中3美術では漫画を描かせるが、生徒がある表現法にたづなると、同じ箇所でも他の生徒もいるはずと、召集をかけては中西教諭が自らの手で描いてみせる



「百聞は一見に如かず」は高3生物でも展開していた。黒田教諭は手羽先を医師のように見事に捌きながら、的確な指示を出していた。

格的な技巧を駆使し、1ページ丸々そっくり真似る。『異世界の主役は我々だ』という元はゲームの作品の模写に取り組んでいた女子生徒は、明らかに経験者の筆使いに見えた。両国には漫画研究部もあり、てっきり所属かと勘違いした次第だが、「今までは遊びでイラストを描いた程度。スクリーントーンを使うのは初めて」とのことだった。教師に描写のコツを教えてもらえるので、傍目からは歴戦の猛者に見えたわけだ。

見渡すと同様に、どちらが手本かわからないほどの、達意の生徒がチラホラ。これはいったいどういうわけだ？ 丸ペンやGペンといった専門用語が教員の口からも発せられている。「教諭も漫画を描いた経験がおありなんですか？」と、小中学生の頃にせっせと帰宅し、神と崇めた手塚治虫、石ノ森章太郎の漫画家入門本を参考に模写をしていた私は、鼻息荒く中西一洋教諭に問いかけた。すると、「いいえ」と拍子抜けする答えが返ってきた。

「ただ、銅版画が自分の専門ですから、技法的には重なるところがあります。上手に描く以上にプロの道具を使い、線にも工夫し、背景も丹念に描くうち、美術表現として気づくことも多いと思うんです」

少年ジャンプの作家のDVDで手順を見せ、生徒がつまづきそうなポイントに気づくと、さっと手助けに入り、「今からカケアミやりますんで、

**容量よくコツが伝わる生物の指導**

**大学合格実績(過去3年間 過年度卒含む)**

国公立大学名	2019	2018	2017
東京大学	5	3	4
京都大学		3	
東京工業大学	3	8	2
一橋大学	4	3	5
東京外国語大学	3	2	1
東京医科歯科大学	2	1	
お茶の水女子大学	1	1	
千葉大学	14	13	13
横浜国立大学	3	2	3
筑波大学	8	5	7
北海道大学	2	4	1
東北大学	2	3	1

私立大学名	2019	2018	2017
慶應義塾大学	15	20	20
早稲田大学	35	48	36
上智大学	17	13	15
国際基督教大学	1	2	1
東京理科大学	57	42	32
明治大学	44	59	50
青山学院大学	12	18	11
立教大学	47	33	18
中央大学	23	16	18
法政大学	23	18	36
学習院大学	6	12	5
津田塾大学		1	5
日本女子大学	7	7	3





予備校講師のように、能率的な解法を教えるだけでなく AI にも務まるかもしれない。しかし、学び合いの場でのファシリテーターは荷が重いだろう。両国でそう思われたのは、高3生物の鶏の手羽先の解剖実験だった。脊椎動物の骨格と筋肉の動きについて学ぶには、手羽先はよいサンプル。人の肘から先の部分に相当し、まず皮を丁寧に剥いで、露出した筋繊維や腱の動きを観察。追って骨格標本も作るという。



芋ようかんが断層実験のモデルになるとはオドロキ。日本地学教育学会に属する南島教諭は、「キッチン地球科学」を提唱する日本地球惑星科学連合学会員でもある

見たい人は来てください」と声をかける。こんな漫画教室、もとい授業だったら退屈せずに済んだらう。教卓に揃えたロットリングペンなどの道具の数々からも、中西教諭の本気度が伺えた。教諭は日本文教出版の『高校生の美術2』の編集協力者に名を連ねている。

中西教諭は「生徒には必ず合評させる。それが彼らを伸ばしている」とも語っていた。思えば、工房で漫画家とアシスタントが共同作業をするのも、一つの方角に互いの思考や技術を束ね、補正しながら進むこと。最たる学び合いの現場かもしれない。来年2月には、AIが手塚治虫の新作を発表するが、神の冒涇とならぬよう祈るだけだ。

理系にこそ有用な“コツ”の重み

ドッグフードの鶏頭水煮を用い、脳や視神経を取り出して観察もさせる。一見不気味だが、医科志望なら通らねばならない道だろう。黒田淳子教諭はかなりのベテランで、両国に来て



図書室には当然、芥川のコーナーも。当時から優秀な教師集団が国語や漢文を教えており、うち吉丸一昌は後に現在の東京芸大教授となり、名曲『早春賦』『故郷を離るる歌』、また両国の校歌の作詞も手がけた



美術部の生徒やOBOGの作品も学校の至る所に飾ってあった。全国総合文化祭(運動部と言うインターハイ)に2014、16年と出場した、いわば強豪校なのだ



サッカー部も人気だ。多くの練習試合を通して、体力・技術だけでなく、精神的な向上も目指す

都立高校では珍しいジャズ研究部もある。名称はモダンジャズ全盛期の残り香か。ビッグバンド志向だったが、最近では人数の関係もあって、部内でいくつかユニットを組んでいるとか



からでも15年になる。これまでも解剖は豚の眼球、マウス、カイコガ幼虫と繰り返してきただけに、生徒も慣れてはしようが、黒田教諭が伝授する「コツ」は傍らで聞いていても、実にわかりやすい。「根気と器用さが要りますが、生徒たちは実験好き。こうしたマクロな実験も、市販されているキットを用いての、大腸菌の形質転換のようなミクロな実験もします」

両国の教諭は総じて、生徒のやる気スイッチを点けるのが上手だ。高1地学でも同様の場面に遭遇。芋ようかんを使つての実験で、活断層のメカニズムを教えていた。透明な容器に入れ、ところてん突きで水平に押すと、圧縮でほぼ45°に亀裂が入る。つまり逆断層が生じるのと同じ仕組みだ。「実験後に食べられるから無駄が出ない」と、飄々と微笑む南島正重教諭。両国で教えるのは9年目で、すっかり名物教員と言えそうだ。自家製の地震計を披露しながら、作るのにいかに腐心したかを語り出すと止まらない。

南島教諭も嘆くが、地学はこうした地震や火山活動、台風などの気象全般、ひいては天体に宇

限られた時間を有効に部活にも打ち込む

適性検査の傾向と対策

19年度から適性検査IとIIを共同作成問題、IIIを独自問題で出題。報告書が満点の場合800点→換算後200点。検査Iは100点→換算後300点。文章の内容を的確に読み取ったり、自分の考えを論理的かつ適切に表現したりする力をみる。検査IIは100点→換算後200点。異なる場面・状況を取り上げて書いた同一(従来は二人)の筆者のそれぞれの文章を題材とし、それぞれに共通する見方や異なる考え方を読み取らせ、それを踏まえた上で受検者の意見を書かせる。大問1が算数、2が社会、3が理科を題材にする。検査IIIは100点→換算後300点。大問2題、小問5題で算数と理科の力を検査資料から情報を読み取ることでみる。報告書(満点)200点+適性検査(換算後満点)800点=1000点。

宙といった、「地球の成り立ちに関わる重要な教科なのに、人気低落する一方」で、きちんと開講される高校も少ない。結果、センター試験の受験者も地学基礎でなら5万人近いが、本科では2000人前後という悪循環が続いている。ただ、台風15号と19号の惨状に見るように、このところまた天災続き。防災の専門家育成も急務だろう。両国はここでも抜かりはない。

ところで、なぜ「断層には芋ようかん」なのだろう。南島教諭曰く、「煉羊羹では弾力がありすぎる。芋ようかんもいろいろ試したけど、元祖の舟和のじゃないとダメ」なのだそう。舟和本店は浅草にあり、もう一つの看板のみつ豆も日本中を席卷した庶民の甘味だ。思わぬ下町パワーを再認識しつつ、これら教科横断的な理系授業にも、確かな「考える国語」

力を感じた。どちらかという文系に人物を出してきた両国だが、図抜けた理系の開発者や研究者が生まれる予感がするではないか!

職員も由来をよく知らない地蔵が敷地内に。どうやら戦後すぐに当時の在校生が空襲の焼け跡で見つけ、そのまま捨て置きせず持ち帰ったのだとか。以来、生徒の行き来をずっと見つめ続けている...

